

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア民話の世界⑥

民話を訪ねる旅 4

剣持 弘子

●ヴェントウレツリ教授との出会い

フィレンツェ大学の日本文学担当のI子先生がアルノ河畔の私たちのアパートに夫を訪ねてこられたのは、夏休みに入る前でした。

そのとき、I子先生は、「ところで、奥様はどういう目的でイタリアに来られたのですか？」と聞いてくださいました。夫のところに来られたお客様に、そんな風に一人前に扱われたことがあまりなかったので、私は半ば驚きながらも率直に「民話の語りの現場に出会いたいと思って」と答えました。その時点で私はなにも期待してはいませんでした。なにしろ、日本では専門家が「もうヨーロッパでは昔話を語っているところは残っていない」と断言しているくらいでしたから。ところが、驚いたことに、「同僚に、民話の調査収集に夢中になっている先生がいますよ」というお答え。にわかには信じられない思いでしたが、「ぜひ紹介してください！」と、とびつきました。

こうしてその後まもなく、I子先生はフィレンツェ大学の研究室で同僚の先生に引き合わせてくださったのです。そのヴェントウレツリ教授は講義のために週の3日を大学近くの下宿で過ごし、残りの4日は母親が一人で暮らすガルファニャーナの山間の自

宅に帰って調査活動を続けているとか。そのとき教授は50代半ば。調査は20代から続けているということでした。



【ガルファニャーナへの車窓からアルプスを望む】

教授はその席で、発行もない『トスカーナ地方の民話資料』をくださいました。思いがけない幸運に、まったく夢心地でした。おまけに、教授は現地調査への同行を約束してくれたのです。私は、もう一つ、ずうずうしく、「講義を聴講させてください」とお願いして、聞き届けられました。

いただいた資料集は、やはり方言で書かれてありました。でも、まったく理解できないというほどでもありませんでした。そこに収められている話は、タイプ

としてはほとんどお馴染みだったからです。それに、教授はその中の多くは新しく出版された標準語の『トスカーナの伝説と民話』に入れてあると教えてくれました。その本を私は早速、フィレンツェの本屋で購入しました。

●フィレンツェ大学で

秋の新学年が始まるとすぐ、聴講生となって週に2日フィレンツェ大学に通いはじめました。教育学部の校舎はアルノ川から南へ一本入った細い道に面していました。なんの変哲もない門を入ったところは、柱廊に囲まれた庭(アトリウム)になっていて、いかにもイタリアらしい雰囲気でした。フィレンツェの建物は地味な外観からは想像できないような光景が中にひろがっていることがあります。ここもそういう建物の一つでした。



【フィレンツェ大学のアトリウム】

建物の中の構造は複雑で、しかも教室はときどき変更があり、毎日掲示板で確認しなければなりません。戸惑っていたのは私だけではなかったようでした。あるとき、やっと探し当てた教室の前で時間がくるのを待っていると、

「今日の授業はここでいいのでしょうか？」と尋ねる人がいました。それは若いイタリア人の女子学生でした。私はどう見てもアジア系のオバチャンで

す。それでも私を頼りにしてくれる学生もいるのだとうれしくなりました。

講義は民間伝承の「分類」からはじまりました。その分類は私にはお馴染みのものでしたが、ホラー(怖い話)の説明にかなりの時間を割かれたのには少々驚きました。でも私は、トスカーナ地方の研究者によって丹念に集められた「怖い話」の資料集を何冊か手に入れていたので、なるほどと合点できました。因に、これらの資料集の中からいくつかヒントを得て、童心社の『怪談レストラン』シリーズで使わせてもらいました。

講座の名目は「民間伝承」。その年のテーマは「民謡」で、先ず子守歌が取り上げられました。先生自身が実際に聞き集めた子守歌のプリントをもとにさまざまな角度からの解説がありました。そのプリントは数回分ずつ教務にもらいに行くことになっていて、教務ではいつも行列ができていました。そういう情報も掲示板で確かめなくてはなりません。なかなか大変なことでした。授業がはじまってからもプリントを入手できていない学生も結構いて、苦労しているのは私だけではないと安心することもありました。

授業についていくためには、録音して聞き直すことが必要でした。先生の許可を得て、私はカセットレコーダーを持ち込み、できるだけ前の席に陣取って集中することにしていました。当時、使っていたカセットレコーダーはもちろんソニーでした。想像以上に日本のソニーの名は知れ渡っているようで、何人かが私のそばに来て、羨ましそうに手に取るということもありました。

●宗教の多様さ

ここで、ちょっと宗教の話をししましょう。あくまでも当時(1990年)の表面的な社会現象としての話ですが、カトリック大本山ヴァチカン市を内包するイタリ

アには当然カトリック信者が多いという印象がありますが、実際には結構多様な状況のようでした。

ある日、授業の前に女子学生が二人私の席に来て、親しげに「私は仏教徒よ」というのです。日本人はみんな仏教徒だと思っているような口ぶりでした。また、別の日、語学学校の会話の時間、だれかが「私のアパートの階下には仏教徒がいて、毎日、太鼓を叩いて大きな声でなんか唱えている」というのです。さらにある日、私たちのアパートに夫を訪ねてきた日本人のジャーナリストが、フィレンツェで手に入れたという創価学会の会報を見せてくれました。それによると、当時フィレンツェには約5千人の信者がいるということでした。フィレンツェの人口は当時50万人足らずでしたから、かなり多いという印象です。

また日本では、語学学校で敬虔なカトリック信者の女教師に出会いましたし、カトリック教会の神父様に会話と講読を教わる機会もありました。お二人の揺るぎない信仰者としての姿には心打たれるものがありました。そうかと思うと、やはり日本で出会ったイタリア語教師がはっきり「無宗教です」と言うのを聞きました。30代の若い二人には別々の場所で会ったのですが、二人とも「聖書も持っていません」ということでした。

●子守歌のNの音

ところで、講義の子守歌です。地域によって特徴の異なる歌詞の解説が主な内容でした。音(おん)を数えたり、韻を踏んだりということを、なるほどと感心しながら聞くことになりました。民話に挿入される歌を訳すとき、韻には悩まされていたのですが、日本語との違いがいつそう身にしみました。

あるとき、子守歌のオノマトペがニンナ、ナンナとNの音だという説明を何気なく聞いていて、思わず

手を挙げて、「日本でも、ネンネンってNの音です」と発言してしまいました。このことにあまり意味はないかもしれませんが。他の国は必ずしもそうではなさそうですから。でも、ちょっと眠くなっていたところを、子守歌のおかげで目が覚めました。



【子どもたちの歌を聞くヴェントウレツリ教授】

今月のお話コーナーは、昔話の中に挿入された子守歌です。この歌の中の赤ちゃんは、むかし攫われた王子の隠し子です。王子がそのことを歌で自分の母親に知らせているのです。「王子の子守歌」というお話です。

【今月のお話コーナー：子守歌】

Fa la nanna, figlio bello;
Se la nonna lo sapesse,
In culla d'oro ti culleria,
In fasce d'oro ti fasceria;
Fa la nanna, figlio mio.

ねんねん 坊や;

もしも おばあさまが このことを知ったら、
金の揺りかごであやしてくれるでしょう、
金のむつきで包んでくれるでしょう、
ねんねん、坊や。

(訳・剣持)

次回は、民話を訪ねる旅5です。

(イタリア民話研究家)

素晴らしき自転車レース 24

『イタリアの2つの側面』

“I due volti dell’ Italia”

谷口 和久

●自転車界最高のライバル

20世紀イタリアにおける、いやすべての時代・すべての国をつうじて、自転車レース史上最高のライバルといえば、ファウスト・コッピとジーノ・バルタリだ。ともに第二次大戦をはさんで、ジロ・ディ・イタリアやツール・ド・フランスといった大レースで活躍し、とくに戦後は、二人の活躍が敗戦国イタリアに明るい希望をもたらした。



【バルタリ(左)とコッピ(右)】

出典：<http://www.premiogentleman.it/fair-play/coppi-e-bartali-sfida-tra-gentleman-di-altri-tempi/>

当時、二人の存在が大きくなるにつれ、このライバル関係も社会現象といっていいほど大きくなっていった。保守派 vs 革新派、地方 vs 都会、カトリック信者 vs 無神論者、等々。当人同士以上に、まわりが焚きつけた。

年齢はほんの5歳しか違わず、ともに田舎のどちらかといえば貧しい出だが、人間見た目がすべてということか、少々野暮ったいバルタリは守旧派や地

方の人々あるいは労働者層に支持されたのに対し、スマートなコッピは革新派や都会の知識層の共感を得るという構図であった。

●批評家によるコッピとバルタリ

いま手元に、二人のライバル関係を描いた文章がある。イタリアの作家・ジャーナリストであるクルツィオ・マラパルテによるものだ。

クルツィオ・マラパルテ、本名クルト・エーリッヒ・ズッケルトは、ドイツ人の父とイタリア人の母の間に、フィレンツェ近郊のプラートで1898年に生まれた。

第一次大戦に従軍したのち、ファシスト党に入党。機関誌の編集や執筆にらつ腕をふるうが、ふるいすぎて肝心のファシズムやムッソリーニを批判することもしばしば。ムッソリーニの逆鱗にふれ筆禍をこうむり、刑務所入りや亡命を繰り返した。しかしながら彼の著書『クーデタの技術』や『壊れたヨーロッパ』は高い評価を受けている。

ペンネームの「マラパルテ」は、ナポレオンの名字「ボナパルト(イタリア語で Buona parte)」、すなわち「良い部分」の意をひっくり返して、「悪い部分(Mala parte)」としたという。このエピソードからも、相当ヒネた人物であることをうかがわせる。

そんなマラパルテによるコッピ・バルタリ評は、タイトルを『イタリアの2つの側面 “I due volti dell’ Italia”』と題され、1949年のツール・ド・フランスの開幕前に執筆されたものである。

その前年の1948年は、バルタリがツールで10年ぶりの優勝を飾った年であった。一言で10年ぶりというが、ツールでもジロでも10年もの間を置いての優勝というのはバルタリを置いて他にいない。そもそも、この10年というのは、いうまでもなく第二次大戦をはさんでのことであり、5年ちかい間レースのないブランク状態だったのである。

そして迎えた1949年のツールでは、バルタリは当然連覇を期待されて優勝候補の一人と目されていた。またコッピにとっては初めてのツール参戦であったが、すでにジロをはじめとしたビッグレースを制していたこともあり、注目の的であった。

当時のツールは現在とは違って、所属チームではなくオリンピックのように国別対抗であった。普段は別のチームに所属しライバルとして競り合っているバルタリとコッピも、ツールではチームメイトとして走らなければならない。二人が同じチームでどのような走りを見せるのか——通常同じチーム内であれば協力し合って走らなければならないのだが——これもまた注目の的であった。



【肩を並べて走るコッピ(左)とバルタリ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Rivalit%C3%A0_Bartali-Coppi

マラパルテによるコッピ・バルタリ評は、もちろんレース予想などではない。彼なりの批評精神がこめられている。いくつか拾い出してみよう。

バルタリは伝統と不変性を信じる人々の仲間であり、コッピは革新を信じる人々の仲間である。

バルタリは来世を信じ、天国を、贖罪を、そしてイエスの復活を信じる。

コッピは合理主義者、懐疑主義者であり、信じるものはおのれ自身のみ、すなわちおのれの筋肉、おのれの肺である。

横になったバルタリは休息をとるアスリートだが、横になったコッピは止まった機械である。

バルタリは戦争によって失われた世界のチャンピオンであり、コッピは戦争と(戦後の)自由主義によって生まれた世界のチャンピオンである。

バルタリの血管を流れるのは血液だが、コッピの血管を流れるのはガソリンだ。

コッピに対しては散々な書きようだが、マラパルテからしたら、このコッピ・バルタリの対比は、ひとつの素材にすぎない。

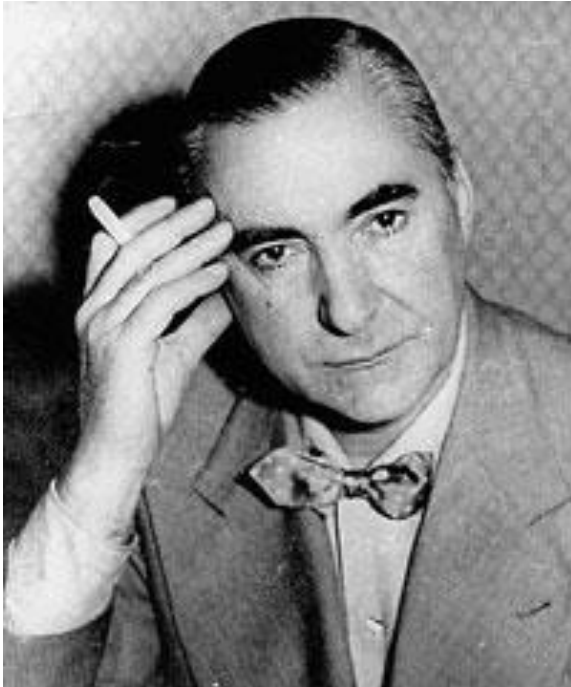
どういふことかという、かつての最盛期においても、ファシストは大きく2つの派閥——守旧派と革新派——にわかれており、マラパルテは守旧派の急先鋒としてペンの剣を振りまくっていたのである。

● 社会対立の図式とライバル関係の図式

ファシズムというのは、その名の通り “fascio” 「束」に由来する言葉で、いふなれば様々な反体制派の寄せ集めであった。そもそもムッソリーニ自身

社会主義者としてそのキャリアをスタートしており、それに加え国粋主義・反共主義といった陣営を束ねて、勢力を拡張していった。その過程で、内部に様々な相対する要素を抱えこんでいったのである。

革新派の代表は、マリネッティをはじめとした未来派である。過去の破壊と機械化によるスピードの追及をテーゼとした運動は、合理主義・近代化の思想的指針であった。



【クルツィオ・マラパルテ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Curzio_Malaparte

いっぽうファシズム内の守旧派は伝統的農村社会を軸足とし、古き良きイタリア（宗教、地方、家族など）に重きをおいた。その一方でイタリアの近代化・資本主義化を否定した。その代表格がマラパルテだったのである。

ファシズムが「反体制」である間は、マラパルテのようなものにも存在意義があったが、「反体制」が「体制」そのものになったのちには、厄介者として扱われたわけである。そういう意味で、マラパルテは純粋でありすぎたのかもしれない。

そして、ファシズムそのものは第二次大戦の終結とともに崩壊したが、マラパルテのとなえた反近代化の流れは、現代においては反グローバリズムやスローフード運動などに姿かたちを変え、細々ながらも脈々とつながっているのである。

こうして見ていくと、マラパルテが古風なバルタリの中にかつての理想を見出し、革新者 Coppini の中にかつての敵対勢力を見出したとしても、言いすぎではなからう。

見方を変えれば、世の中の守旧・革新の対立が、姿かたちを変えて、争いの場を政治から自転車レースに移した、ともいえるのではないだろうか。

スマートな物言いや合理的な割り切った態度に対する反発。かたや、迷信じみた慣習や古びたものに固執する人々に対する侮蔑。対立の図式は根深いもののように思われる。

ともかく、時代とともにある偉大なスポーツ選手は、社会の図式を映す鏡といえるだろう。

【参考文献】

Gioachino Gili, *Coppi e Bartali gli eterni rivali*, DeAGOSTINI, 2009

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009

『壊れたヨーロッパ』（クルツィオ・マラパルテ著、古賀 弘人訳、晶文社、1990）

『ツール 100 話』（安家達也著、未知谷、2009）

『イタリア現代史研究』（北原敦著、岩波書店、2002）

『ファシズムと文化』（田之倉稔、山川出版社、2004）

『イタリア・ファシズム 戦士の革命・生産者の国家』（ファシズム研究会編、太陽出版、1985）

『光の帝国・迷宮の革命』（伊藤公雄、青弓社、1993）

『ファシズムと文化』（田之倉稔、山川出版社、2004）

（当館スタッフ）

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>